

# 「アメリカ・インディアン」と

## 「先住アメリカ人」

—北アメリカ大陸先住民の呼称について—

伊 藤 聰

---

### キー・ワード

アメリカ・インディアン American Indian

先住アメリカ人（原住アメリカ人） Native American

イヌイット Inuit

エスキモー Eskimo

アリュート Aleut

ハワイ先住民（原住民） Hawaiian Native

### 序

コロンブスの地理認識の誤りから始まったといえる、「北アメリカ大陸先住民」（ここでは、現アメリカ合衆国先住民に限定される）であるアメリカ・インディアンに対する呼称の問題は現在に至るまで続いている。筆者もまた機会があるたびに自分なりの考え方を示してきたが、当初から「アメリカ・インディアン」ないし「インディアン」という表現の使用にこだわっている（本稿でも基本的にはこれらの語を使用する）。「先住民」という表現にも疑

間を抱えている。「アメリカ・インディアン」という表現は誤りであるから使用すべきではないと主張する人々も少なくない。その逆に、「先住アメリカ人」という表現が「はやり」であるともいえる。

このような呼称をめぐる状況は研究者ばかりでなく、当の「インディアン」にとっても不幸なことではないか。また、単なる呼び方の問題ではなく、その呼称の歴史的、社会的、民族誌学的、心理学的背景が存在することも忘れてはならない。

本稿後段で筆者の考え方を改めて詳述するつもりであるが、まずアメリカの研究者やわが国の研究者さらには翻訳家などの考え方や態度というようなものを順次紹介する。それにより、呼称をめぐる問題点を明らかにしてゆきたい。

## I. アメリカの研究者などの考え方

手元にあるアメリカで出版されたインディアン関係の書籍を、あるいは翻訳されたものを、出版が古いものから新しいものまで 23 冊をランダムに抜き出して、著者の呼称に関する主張や、翻訳の場合はその訳者の意見などを含めて調査した。その中には、ここで問題にする呼称には全くこだわらず **American Indian**(ないし **Indian**、以下同様)のみを使用するもの、使用理由を明らかにした上で **American Indian** のみを用いるもの、**American Indian** と **Native American (American Native)** を特別な説明もなく随意に併用するもの、そして、きちんと説明を加えた上でどちらかのみを、あるいは両方を適宜使用するもの、などがある。それらを出版年順に大まかにではあるが分類する。

### (1) **American Indian (Indian)** のみを説明なく使用するもの

1. ジョン・コスター『この大地、わが大地』、清水知久訳、三一書房、1977

2. Kelly, Lawrence C., *Federal Indian Policy*, Chelsea House Publishers, 1990
  3. Bachman, Ronet, *Death and Violence on the Reservation: Homicide, Family Violence, and Suicide in American Indian Populations*, Auburn House, 1992
  4. Dinnerstein, Leonard, Roger L. Nichols and David M. Reimers, *Natives and Strangers: A Multicultural History of Americans*, 1996
  5. レオナルド・クロウ・ドッグ、リチャード・アードス『魂の指導者 クロウ・ドッグ』、伊藤由紀子訳、サンマーク出版, 1998
  6. Cook-Lynn, Elizabeth, *Anti-Indianism in Modern America: A Voice from Tatekeya's Earth*, The University of Illinois, 2001
  7. Daily, David W., *Battle for the BIA: G.G.E.Lindquist and the Missionary Crusade Against John Collier*, The University of Arizona Press, 2004
  8. Reyhner, Jon Allan, *American Indian Education: A History*, The University of Oklahoma Press, 2004
- (2) American Indian (Indian)のみを、説明を加えて使用するもの
1. Weeks, Philip, *Farewell, My Nation: the American Indian and the United States in the Nineteenth Century*, Harlan Davidson, Inc., 1990
- 当著者によると、「インディアンの人びとに現在最も受け入れられている用語は“American Indians”である。“Native Americans”は現在は使用されない。それは、アメリカで現在生まれる人はすべて“native American”だからである」。さらに、今後は“First Nations,” “indigenous Americans,” “indigenous Nations”が世界の流れに沿って使用頻度が高まる、としているが、この予測は今のところ当たっていない。

2. Bordewich, Fergus M., *Killing the White Man's Indian*, Anchor Books, 1996

著者によると、「Indian」という語を使用する。理由は子供ならそれを誰でも知っており、誤称といえども素晴らしいものだからである。他方、「Native American」は不自然であり、十分とはいえない」。この著者による説明も不十分である。

3. Garrow, Carrie E., and Sarah Deer, *Tribal Criminal Law and Procedure*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2004

著者らによれば、「Indian,」 “American Indian” を使用する理由は、それらが先住民、非先住民、学会などにより最も一般的に使用されているからだとする。また、「Native American」については主要学会などでは一般的ではあるが、当語はアメリカで生まれた人すべてを指しうるので、その使用を避けたいとしている。先の Weeks の主張と同様である。

4. ジョージ・クローニン『アメリカン・インディアンの歌』、渡辺信二訳、松柏社、2005

訳者は呼称について次のように述べている。「白人植民の以前から北アメリカ大陸に住んできた人びとを総称するために、現在、ネイティブ・アメリカンという言い方が流布しているが、これは、厳密に言えば、白人を含めてアメリカに生まれた人たちすべてを意味しうる、、、『インディアン』に関しては、今もそう呼ばれるのを好む人たちが多くいることも確かだし、大学レベルのカリキュラムでは、なお半数ほどに、『アメリカ・インディアン・プログラム』という名称が使われている。結局、『アメリカ・インディアン』が原書のタイトルであるため、本書もまた、『アメリカ・インディアン』という言葉を使うことにした」。

当訳者の説明は、先の Garrows らの主張と同じもので、十分に納得できるところである。ただ、「インディアンと呼ばれるのを好む人たちが多くいる」としているが、何を根拠にした主張なのか、「多く」とはど

れくらいなのか、説明不足であるといえる。

(3) American Indian と Native American を説明なしで併用するもの

1. Dippie, Brian W., *The Vanishing American*, University Press of Kansas, 1982

2. Senese, Guy B., *Self-determination and the Social Education of Native Americans*, Praeger Publishers, 1991

3. ポーラ・アンダーウッド『一万年の旅路』、星川淳訳、翔泳社、1998

原題は *The Walking People: A Native American Oral History* となっており、Native American が使用されている。また、「はじめに」のなかで「イロコイ連邦」「オナイダ族」という表現が見られるが、本文はすべて「一族」という表現で統一されている。

訳者の「あとがき」では、「ネイティブ・アメリカン」、「インディアン」、「先住民」が特に説明もなく混用されている。

4. ブラックウルフ・ジョーンズ、ジーナ・ジョーンズ『ネイティブ・アメリカン 聖なる言葉』、加藤諦三訳、大和書房、1998

本文では「ネイティブ・アメリカン」がわずか一箇所使用されているだけで後はすべて「インディアン」あるが、訳者が「解説」の中で「インディアン」との違いや原著者の意図などを説明することなく「ネイティブ・アメリカン」を濫用している。気取っている感じさえする。

5. Nielsen, Marianne O., and Robert A. Silverman, ed., *Native Americans, Crime, and Justice*, Westview Press, 1996

インディアン、非インディアンによる全部で37編の論文が収録されているが、その多くが他の本やジャーナルからの抜粋であるためか、“American Indian” と “Native American” の2つの用語が入り混じっている。そのことについての説明はない。それぞれの執筆者に任せたとのことであろうか。

6. Grounds, Richard A., George E. Tinker, and David E. Wilkins, ed.,

*Native Voices: American Indian Identity and Resistance*, University Press of Kansas, 2003

7. Ward, Carol Jane, *Native Americans in the School System: Family, Community, and Academic Achievement*, Altamira Press, 2005

(4) American Indian と Native American を併用し、その説明を加えているもの

1. Berkhofer, Jr., Robert F., *The White Man's Indian*, Vintage Books, 1978

ここでは、白人の対インディアン関係の歴史を辿りながら、白人が持つ“Indian” と “Native American” という語に対するイメージの変遷が論じられている。いかにも、本稿の目的に沿った内容にも思えるが、当著書がその答えを与えてくれているわけではない。ただ、著者は「想像とイデオロギーの Indian」と「真の存在と接触としての Native American」とを対比させており、そこから著者の呼称に関する考え方が伺える。つまり、正しくは Native American と呼ぶべきであり、Indian という呼称は彼らをよく知っているわけではない白人のイメージや想像を元にしたものである、ということではないか。

2. Deloria, Jr., Vine, ed., *American Indian Policy in the Twentieth Century*, University of Oklahoma Press, 1985

Deloria は序文において執筆者 10 人を紹介しているが、そこでは“Indian” のみを使用している。執筆者の一人である J. Chaudhuri が「論争の続く名称 “Indian” に替わるものとしての “Native American” は未だに受容されているとはいえない」としている。また、同様の主張をしている人物として、インディアン活動家として知られる Russel Means を紹介している。

Deloria はスー族インディアンであり、この時点ではアリゾナ大学教授である。また、最も古いインディアン活動団体「全国アメリカ・イン

ディアン会議」の前理事長である。多くの本を著すことによりインディアンの権利回復運動をリードしているひとりである。

全執筆者の中でただひとり M.G. Lacy のみ が その論文の途中で突然、“Native American” の使用を開始し、その後 2 回用いている。この使用理由の説明はなされていない。

3. Cornell, Stephen, *The Return of the Native*, Oxford University Press, 1988

前書きの中で Cornell は次のように述べている。「私はアメリカの原住民の (indigenous) 人びととその後裔を指すのに “Indian” と “Native American” を自由に交互に用いてきた。両語ともインディアンに広く使用されてきた。“Indian” は居留地や都会のインディアン地域社会でより一般的であり、“Native American” は大学のインテリやインディアン団体の人びとの間で好まれる傾向がある」。

本文での使用状況をみると、“Indian” が圧倒的に多い。それは、本書が政府の対インディアン政策を歴史的に考察しているために、“Indian” という語が含まれる法律名などがしばしば登場するからとも判断できる。

4. Oswalt, Wendell H., *This Land Was Theirs: A Study of Native Americans*, McGraw-Hill Co., 2002

著者は次のように述べている。「本書では新世界の原住民の (aboriginal) 人びとを指すのに、“Indian,” “Native American,” “American Indian” が使用される。インディアン自身は自分たちのことを普段の会話の中では “Indian” あるいは “Skins” と呼ぶことが多い。“Skins” については筆者は始めて目にする。手元の「スラング辞典」を含むどの辞書にも載っていない。

また著者は一般的に次のような点が指摘されるのではないかと述べている。「多くの “Indians” と “Aleuts,” “Eskimos” とは文化的に大きく異なるので、まとめて “Native Americans” と呼ぶことができる

かもしれない」。

ちなみに、“Eskimo”は蔑称であるとして現在は“Inuit”が一般的になっているが、このOswaltによると、すべてのEskimoがInuitであるわけではなく、アラスカやシベリアの一部の人びとはYuitである。

## Ⅱ. わが国における出版物から

わが国においても、インディアン関係の書籍が出版されるようになってから久しいが、その中で呼称に関して言及しているものを取り上げる。

### 1. 横須賀孝弘『ハウ・コラ』、日本放送協会、1991

『インディアン』という民族はいない、、、生活のしかたも違えば言語も多様な北アメリカの先住民をひと括りにして『インディアン』と呼ぶのは、本来、アジアの諸国民を全部ひっくるめて『アジア人』と呼ぶほどの意味しか持たない」、としながらも、本文では「インディアン」を使用している。著書のサブ・タイトルも「インディアンに学ぶ」となっているが、その説明はない。

### 2. スーザン・小山『アメリカ・インディアン 死闘の歴史』、三一書房、1995

「1970年代の市民権運動以来『ネイティブ・アメリカン』という呼称が一般的だが、さらにこの延長として自分達はこの大陸の正当の居住者、最初のアメリカ人であるという意味合いから『ファースト・アメリカン』という呼称を主張する人々もいる。」、、「私としてはここでは便宜上すべて『インディアン』、『アメリカン・インディアン』と従来の慣習に従い、時に応じてそれぞれ『～部族』『原住民』『先住民族』という言葉を使うことにしている」。



後半の「従来 of 慣習に従い」という部分は理解できるが、その後の説明へどう続くのか判然としない。また、『原住民』と『先住民族』の違いも明らかではない。単に表現に変化を持たせたかったということか。

3-a. シャーマン・アレクシー『インディアン・キラー』、金原瑞人訳、東京創元社、1999

大場正明は巻末の「解説」の中で、「彼（アレクシー）はネイティヴ・アメリカンというのは、白人リベラルが作った表現であるとして、インディアンという言葉を使う」、と述べている。

b. 相原優子「極限で見る夢：リザベーションからの視線」（西村頼男、喜納育江編著『ネイティヴ・アメリカンの文学』所収）、ミネルヴァ書房、2002

この中でアレクシーの言葉が引用されている。つまり、「この言葉（『インディアン』）は、今では僕たちのものだ。僕たちはインディアンである。インドのインディアンとは全く関係がない。僕たちは、アメリカ・インディアンではない。僕たちはインディアンだ。『イン・ディン（In-din）』と発音するんだ。僕たちのものである。この言葉は、僕たちが所有しているのだ。返したりするものか」。

自身スポークマン/クーダレーヌ族インディアンであるアレクシーの主張はきわめて強固であり、また独特なものである。彼は、インテリたちによって盛んに使用され始めた「ネイティヴ・アメリカン」という呼称について、どの国にも存在する、新しいものに飛びつくインテリのうさん臭さを鋭く感じているのではないか。筆者にもよく理解できるところである。ここで紹介している論文が収められている本のタイトル『ネイティヴ・アメリカンの文学』もまた糾弾されそうである。

4. ノーバート・S・ヒル・ジュニア『俺の心は大地とひとつだ』、ぬくみちほ訳、めるくまーる、2000

「訳者あとがき」にみられる「インディアン」という表現に関する訳者の主張を要約すると次のようになる。

- ①「インディアン」という呼び名に抵抗感を抱いている。それは、インディアンと呼ばれるのは嫌だ、といういく部族の人たちと会っているからだ。
- ②「ネイティブ・アメリカン」の語も、サモア、ミクロネシアの先住民のことを考えると、適切ではない。
- ③それぞれの部族の名前で呼ぶのが本来的であろうと考えて、原著で「インディアン」とされているところでも、訳文中ではおおむね部族名を採用した。
- ④「エスキモー」の語も、当の人たちは蔑称として斥けているが、替わるべき適切な総称がないので、原著および慣用に従うしかなかった。

この訳者の主張の中で①の「いく部族」というのはいくつであろうか。現在でもアメリカ・インディアン部族の数は **230** にも及ぶ。このうちのどれだけの部族の人々に意見を聞いたのだろうか。②の主張は正しい。③については、原著の用語をこのように訳者が変更するのは安易に過ぎるのではないか。④にある「エスキモー」に替わる語には「イヌイト」があるので、訳者の主張は適切ではない。もっとも、先に触れた **Oswalt** によれば、すべての **Eskimo** が **Inuit** であるわけではない。

#### 5. 綾部恒雄監修『世界民族事典』、弘文堂、2000

「アメリカ」の項をみると、「先住民であったネイティブ・アメリカン（アメリカ・インディアン、エスキモー、アリュート、メキシコ人の一部、ハワイのポリネシア人）、…」となっており、下位項目の「ネイティブ・アメリカン」には、「合衆国の先住民人口の **90%**以上はいわゆるアメリカ・インディアンと呼ばれる人々である」となっている。事典らしく、簡潔にまた適切に表現されている。

#### 6. 高橋順一『はるかなるオクラホマ』、はる書房、2002

この著者は、「インディアンという名称」の項で、次のように述べている。「アメリカン・インディアンという言葉の複雑な歴史的背景、、、インディアンという言葉はヨーロッパ人による植民地化の歴史をその

まま記憶にとどめた言葉である。しかし、同時に、インディアンという言葉は先住諸民族のアイデンティティに関する新しい認識の範疇を表す言葉でもある。」、、「後に、先住民自身もインディアンという言葉を受け容れ、外来の白人や黒人に対比される先住の民族という共通の認識を深め、部族の境界を越えた集団アイデンティティを形成していったのである。部族の差を越えてすべての『インディアン』の結束を訴える汎インディアン主義の運動は、そのような認識が政治的な形をとったもので、もともとが外来者に押しつけられた言葉を、今度は先住民自身が主体的に使うようになったのである。」、、「最近ではインディアンという語の持つ植地的な意味合いを除去するために、『ネイティブアメリカン』という言葉による置き換えが提唱されている。しかし、これは基本的に政治的なコンテキストで使われる言葉であり、日常語としては馴染んでいない。またネイティブアメリカンという語には、エスキモーやアリューートはもちろん、ハワイ諸島先住民等、米国領土内のすべての先住民が含まれてしまう。したがって、その点ではインディアンとは明らかに意味が異なっており、代替語としては必ずしも適切ではない。

当著者の考えはきわめて妥当だといえるのではないか。

本文は、部族名の他はすべて「インディアン」で統一されている。サブタイトルにだけは「ネイティブアメリカン」という表現が見られるが、これは「売れ行き」が最大の関心事である編集部の意向であろうか。ここに引用した文の前半は、後で示すように、筆者がすでに 1993 年という法律の紹介の中で明らかにしている。

### Ⅲ. 筆者の考え方

冒頭で述べたように、筆者は「インディアン」という呼称についての筆者自身の考え方を、これまで論文の中で、あるいは「注」として数回表明して

きた。それらを改めてここに紹介する。

(1) 「英語句から探るインディアン・白人関係小史」(『泉』第6号、愛知学泉大学文人研究会) 1993

コロンブスのアメリカ到達以後の「インディアン」に対する呼称の歴史を述べた後、当時代表的なインディアン紙であった *Wassaja* の編集部のこの呼称に関する考え方を次のように紹介している。それは、一インディアン読者の次のような質問から始まる。

「貴紙は **Native Americans** という名称をも使用しておられますが、私は **American Indians** の使用に反対です。私たちは **Indians** ではありませんでした。私たちは自部族の構成員であります。 **Natives** がよりよい選択肢であり、私の知る大部分のインディアンが好むものだと思います。私たちの考えに同意し、 **Native Americans** を使用していただきたく思います」。これに対し編集部は以下のごとく回答している。

「もちろん、**American Indians** は誤称です。しかしこの語句は文献に出ています。多くの研究書や文芸作品ばかりでなく、政府の法令、法律文書や裁判所の判決にもみられます。

私たちが、自分たち自身のことをどう呼ぶべきか、誰が決めるべきだとお考えでしょうか？もしある部族が、**Native Americans** として知られたいと望むならば、彼ら自身の意見でそうするでしょう。全部族からなる全インディアンに対する一般的な名称が、便宜上必要です。私たちは、この2つの名称を交互に使用します。それが編集部の決定だからです」。

最後の部分はやや歯切れが悪いが、当時の筆者には納得のゆく説明であった。当編集部の考え方は現在でも十分に通用するのではないか。この文の後、筆者は次のように付け加えている。

「文化や肉体的特徴をみても、きわめて多様であるこれらの人々をまとめて呼ぶこと自体、無理なことであったが、いまは少なくとも、

American Indians という総称を、権利回復運動に利用することが得策であろう。、、、 Native Americans と (American) Indians が現在最も一般的である。今後も同様に使用されてゆくであろうが、彼らの権利回復運動が進展するにつれて、前者の使用頻度が高くなると推測される」。

Native Americans という呼称については、まさしくそのとおりになったが、次項にある「原住アメリカ人言語法」で指摘されているように、この呼称は少なくとも法的には適切なものではない。先の Weeks も同様の主張をしている [(2)-1]。

(2) 「原住アメリカ人言語法」(『泉』第 10 号、愛知学泉大学文人研究会) 1996

この法律の元のタイトルにある Native American に対する訳語を「原住アメリカ人」とした理由を説明した中で、筆者は大きな誤りを犯している。「原住アメリカ人」とは、インディアンばかりでなく、ハワイ原住民、アメリカ領太平洋諸島原住民をも含むのである(当法第 103 条第 1 項)。実際には、“Indian” を指す語として、妥当とはいえないが“Native American” という呼称が広く使用されるようになっていることは前にも述べた。

本論とは少々ずれるが、訳語について補足したい。筆者は当論文においては Native American に「原住アメリカ人」という訳語を与えているが、その後の論文では再び「先住アメリカ人」と変えている。その理由を説明しなければならない。簡単に言えば、筆者は周りの状況に残念ながら屈したということである。高名な研究者たちがすでに、「先住アメリカ人」という言葉を、これまた高名な出版社から出された著書や論文の中で使用している。その影響は計り知れない。また一方で、「原住民」という言葉から一般の人びとが受けるマイナスのイメージは 21 世紀の今でも残存している。筒井康隆のいう「言葉狩り」は今でも続いているのである。続いている、とうよりむしろ「悪化」しているといった方が正確であるかもしれない。

(3) 「アメリカ・インディアン犯罪の特殊性について」(『経営研究』第9巻第1号、愛知学泉大学経営研究所)、2005

ここでは、「インディアン」を公的に定義している「インディアン教育法」、「先住」と「原住」という言葉に対する日本人の反応、自らを「原住民」と呼ぶ台湾先住民、マスコミが「言葉狩り」に屈した例、などについて述べた後、最後の部分で、先に紹介した作家シャーマン・アレクシー[II-(3)]の考え方を紹介している。そして、筆者はこの作家の考えに全く同意するとの一文を添えている。

## 結

先に紹介した高橋順一が述べているように、アメリカ・インディアンという言葉の歴史的背景は複雑である。しかも、彼らの言語や文化は多種多様であり、さらにはそれぞれの対白人関係もさまざまである。彼らをまとめて「アメリカ・インディアン」と称することが果たして適切なのか、あらためて考え込んでしまう。

「先住アメリカ人」が法律用語として、インディアンだけを指すのではないとは理解していても、「北アメリカ大陸」に先住(原住)していたのはインディアンだけであり、ハワイ先住民やアメリカ領太平洋諸島先住民の場合とは事情が大きく異なる。したがって、インディアンのことだけを先住(原住)アメリカ人と呼んでもおかしくはない、とも主張できそうである。

インディアン自身はどう考えているのだろうか。それが最も大切であることは言うまでもない。これまで意見を紹介してきた人びとの約3分の1は、論集の各執筆者を含めてインディアンである。それぞれが使用する呼称はさまざまであり、そのことについての説明はない。

ここで、やや過激な活動団体「アメリカ・インディアン運動」(1968年設立)の指導者の一人 Dennis J. Banks の最近の使用語を紹介する。彼自身、

呼称に関する意見を表明しているわけではないが、それは、Native People と Indian である (Foreword to *Native America: Portrait of the Peoples*, ed. by Duane Champagne, Visible Ink Press, 1994)。Banks は「アメリカ・インディアン運動」の設立にも関わっているが、呼称に関するさまざまな変化を感じているのだろうか。彼は多くのインディアンに影響力を持つ人物であるが、他方、名もない若いインディアンたちが使用する呼称も紹介しておきたい。アリゾナ大学の「アメリカ・インディアン研究プログラム」後援下の学生たちにより出版されている雑誌からである。詩やエッセイの他、今でも続く差別や偏見についてなど、若いインディアンの意見などが広く紹介されている。呼称については、いろいろな表現が使用されており、むしろ全く気にしていない、あるいはいろいろあって何が悪いのか、という感じさえある。Indians, “Indians,” American Indians, North American Indians, Indigenous Peoples, First Nations Peoples などの表現がみられる (Red Ink, Spring/Fall 2001, Volume 9.1/10.1)。先述の Banks は現在なお意気軒昂とはいえ 75 歳と年老いており、一方、現代アメリカ社会に生きる若いインディアン達の意識は大きく変貌しているのかもしれない。

筆者としては悩みながらも、やはりこれまでの主張を繰り返さざるをえない。つまり、「インディアン」、「アメリカ・インディアン」という語を今後も使用するということである。現在のアメリカは、イラク戦争を始めとして多くの問題を抱えており、その悪状況が貧困者やインディアンなどの少数者にしわ寄せされている。いろいろな部族が「一つの民族」として、「アメリカ・インディアン」として団結することにより、自分たちの権利の擁護および権利回復のための運動に引き続き取り組むことが不可欠であろう。高等教育を受けるインディアンが増えてきている今、先に紹介した Vine Deloria, Jr. のような影響力のある人びとが多く育ち、ペンによる活動が活発になることも重要である。

自分たち自身の呼称に関して、全インディアンあるいは全部族による投票により決定するということは可能であろうか。仮に可能だとしても、はたし

て結論が容易に得られるのであろうか。

あるいはさらに、他の先住民族つまりハワイ先住民やアメリカ領太平洋諸島先住民たちと仮に協同することできるとしたら、権利回復のためにより良い結果が果たして期待できるのか。

インディアンは「北アメリカ大陸」の真の先住民として、自らを「原住民」と呼ぶことにより、権利回復運動を展開できないであろうか。台湾先住民族は自分たちこそ台湾の元来の住人であることを主張するために、あえて自らを「原住民」と呼びながら運動を進めている。台湾原住民立法議員であり、復権運動にも取り組んでいる高金素梅の次の言葉で本稿を締めくくりたい。

「原住民を取り巻く環境は厳しい。インフラから教育まで、すべての面で改善と強化が必要だ。これからの道も険しいだろう。しかし、私たちが求めるのは、支配者からの施しや恩恵ではない。少数者とはいえ、島の主人としての当然の権利を、今後主張してゆく。」(インタビュー「台湾先住民は何を望んでいるか」、『世界』2005、4)

(2007年1月9日脱稿)